

pon

kanpi-sos

# ポン カンピソシ



# 8

アイヌ文化紹介小冊子

民具



## 本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連が定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995(平成7)年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「話す」で言葉を、2冊目「着る」、3冊目「食べる」、4冊目「住まい」で衣・食・住を、5冊目「祈る」で信仰を、6冊目「口頭文芸」、7冊目「芸能」では口頭で伝承されてきた物語や、歌と踊りなどについて紹介してきました。

この8冊目では、民具についてとりあげました。アイヌの伝統的な暮らしの中で使われてきたいろいろな民具のあらましについて、写真を交えて説明しています。また、民具について学ぶための資料や学ぶことのできる施設なども紹介しています。

ポン カンピ ソシ  
pon kanpi - sos 小冊子  
小さい 紙 束

## 目次

[1] アイヌの民具のあらまし	2
[2] いろいろな民具	8
1 身にまとう、身につける	10
2 家のうちそと	16
3 野や山で、海や川で	22
[3] 民具について学ぶために	28
1 文献など	28
2 施設	30

# [ 1 ] アイヌの民具のあらし

どの民族にも、暮らしの中で用いられてきた様々な民具があります。

アイヌの昔の暮らしの様子を記録した文献などには、当時使われていたいろいろな民具が描かれています。アイヌの昔話などで語られる暮らしにも、様々な民具が登場します。

A variety of handicrafts that have been used in the activities of daily living and in subsistence-related activities and rituals are found in all of the ethnic groups. Handicrafts of various kinds which were in use are depicted in records found in archives dealing with the early lifestyles of the Ainu. A range of handcrafted materials often appears in the orally transmitted folktales of Ainu people.

## Ainu Folk Art: Overview of Ainu Handicrafts

現在、これらのアイヌの民具で身近に見ることができるのは、博物館などで展示されている品々です。これらは、古いもので今からおおよそ100～200年ほど前のものです。

The most accessible materials are those displayed at the museums and the origin of some of the oldest ones can go back to 100 to 200 years or more.

---

明治時代以降、アイヌの生活環境も大きく変化しました。新たな道具や機械が生活に取り入れられるいっぽうで、それまでの暮らしで用いられてきた民具はしだいに姿を消していきました。

このような変化は、他の民族でも同じように見られたことですが、アイヌの場合は、伝統的な民具を作る材料の入手が困難になったこと、同化主義の圧力のもとで昔からの民具を使う機会が減少したり、作る技術を伝承しづらくなったりしたことなども原因です。また、家庭に残されていた民具が、商売などを目的とする人たちの手に渡っていったことなども多かったとされています。

そうした中でも、古い民具を大切に残しておいた人や、その作り方などを学び伝えた人たちも少なくありませんでした。また、土産物や工芸品として、伝統的な技を活かした新たな木彫りや衣服なども創られるようになっていきます。

Ainu people have undergone a series of drastic changes in lifestyles after the Meiji era as seen in the introduction of new tools and equipment and the gradual disappearance of the handicrafts which were traditionally in use in their daily lives. These sorts of changes have been seen in many cases with other ethnic groups. However, there are other contributing factors to the changes in the case of Ainu people. These include the difficulty of obtaining materials to make traditional handicrafts and much less opportunity under the pressure of assimilation both to use those handicrafts and to transmit their traditional techniques to the younger generation. Remaining handicrafts often have been traded as antique objects.

However, some old items of handcraft were well preserved and the skills to make them were taught by the Ainu in spite of these changes in lifestyle. Today new styles of woodcarving and dressmaking based on their traditional techniques have been developed producing souvenir handicrafts as well as those with high artistic value.

Ainu people today are leading their lives in the same manner as other people. The handicrafts described in this handbook are usually not in use in their daily lives. The momentum created in recent years for the restoration and transmission of traditional cultures has led to more opportunities for exhibitions and workshops to learn techniques and skills.

This handbook intends to shed light mostly on those handicrafts that were used from the end of the Edo era to the beginning of the Meiji era.

---

現代では、アイヌも普段は周囲の人びとと同じような暮らしをしています。この小冊子で紹介するような民具の多くは、実際に日常の生活で用いられているわけではありません。

また、近年の伝統文化の復興・継承の気運の中で、伝統的な民具の作り方を学ぶ講習会や作品の展覧会が開かれたりすることも増えてきました。

この小冊子では、おおよそ江戸時代の終わりごろから明治時代の初めごろにかけて用いられていたとされる民具を中心に紹介します。



写真 1 北海道立アイヌ総合センターにおける編み袋の講習会

この小冊子ではアイヌの様々な民具について紹介していますが、これらのうち、衣・食・住に関係するものについては、小冊子の2、3、4冊目「着る」、「食べる」、「住まい」でも取り上げています。また、信仰や儀式に関するものについては5冊目「祈る」、楽器については7冊目「芸能」でも取り上げています。これらの小冊子では、衣服や食べ物などそれぞれのテーマについて学ぶための参考文献や施設なども紹介しています。

アイヌの民具には、工芸品としてもすぐれたものが多いことが早くから知られていました。これらは、交易を通じて本州など周辺の地域や社会にもたらされ、紹介されています。



写真2 盆



写真3 はし  
箸入れ



現在アイヌの工芸品として有名なものに木彫りのクマなどがありますが、このようなものが作られるようになったのは、ここ70～80年ほどのことです。サハリンではクマなどをかたどった木彫りが古くから見られますが、これは主に儀式のために作られていたものです。

北海道では、動物や人間の姿をしたもので置きものとして飾っておくような木彫りは作られなかったとされています。その理由については、このようなものを作ると「魂<sup>たましい</sup>」が宿るとされ、もしそれが悪い「魂」だと人間に害をもたらしたりするおそれがあるからだ、ということがよく言われているようです。

現在よく見られるような木彫りのクマは、1920年代ごろに八雲町<sup>やくも</sup>で作られるようになり、ほぼ同じころから旭川のアイヌの人たちが副業や工芸作品として自分たちの木彫りの技術を活かして作ったものが、各地に広まったと考えられています。



写真4 木彫りのクマ  
1920年代ごろに旭川で彫られたものです。

## [2] いろいろな民具

アイヌの民具は、基本的には、使う人たちが自分で作るか、または交易などを通じて入手したものです。専門の職人がいたり、工場があるわけではありません。そうした中でも、民具の種類によっては、年齢や性別、立場の違いによって、作ってよいとされる人がある程度決まっているものもあります。

昔の暮らしの中では、彫り物や縫い物などがきちんとできるようになることが、しっかりした大人になるために大切なこととされ、民具を上手に作ることでできる人は尊敬されたと言われています。



写真5 ハマニンニク（テンキグサ）で編んだ容器  
主に千島で見られたものです。

Ainu's handicrafts were made not by the professional craftsman or at a workshop but basically by those who intended them for personal use or they were acquired through trade. People who were allowed to make handicrafts were determined to some extent by the type of craft and by their age and sex. They were also determined by the position within their own community, social status or their designated functions in ceremonial matters.

It was deemed indispensable for Ainu men and women to acquire the skills for carving and sewing in order to be treated as adults and those who could make handicrafts skillfully commanded respects.

## A variety of Handicrafts

アイヌの文化は、北海道とサハリン、千島などでそれぞれ異なり、また、同じ北海道でも地域によって異なります。用いられてきた民具にも、地域によって種類などに違いがあります。同じような民具でも、その呼び名が地域によって異なることも多く見られます\*。

博物館や本などでアイヌの民具が紹介されているのを見る場合にも、その民具や民具の名称がどの地域のものなのかといった点についての注意が必要です。

\*例えば、儀式で酒を捧げるときに使うへら（17ページ）は、北海道のほかサハリンなどにも見られますが、北海道では多くの地域で「イクパスイ」と呼ばれ、サハリンでは主に「イクニシ」と呼ばれます。



Ainu cultural patterns differ among Hokkaido, Sakhalin and the Kuriles, and for that matter even among the regions in Hokkaido. There is a difference in the types of crafts used among the areas in Hokkaido and even the same handicrafts are often called in a different way depending upon the regions. Due attention therefore, should be given to the origins of the handicrafts when they are introduced at the exhibition or in writing.

photo 5 : A basket often seen in the Kuriles

アイヌの様々な民具について、主にそれらの民具を使う場所や場面にしながら紹介します。

## 1 身にまとう、身につける

衣服や装身具とそれらに関係するもの、そのほか儀式のときや日常でよく身につけたり持ち歩いたりしたとされるものの中から、いくつかを紹介します。

### 衣服

アイヌの伝統的な衣服は、獣・魚・鳥の皮、樹木や草の内皮からとった繊維、木綿を素材とするものが知られています。



図1 『蝦夷島奇観』  
200年ほど前に書かれたもので、輪になって歌いながら踊るようすを描いた部分です。わざといろいろな衣服をとりまぜて描かれています。

A variety of Ainu handicrafts are shown in this handbook according to the places and occasions they were used.

## 1 Items to Wear

### Clothing

photo 6 : Cotton clothing collected in the Kuriles



写真 6 木綿を素材にした衣服  
千島で収集されたものです。文様の部分の  
布は絹を使っています。

博物館などで展示されている、様々な文様が施された衣服の多くは、儀式のときなどに着る晴れ着として用いられたものです。労働などふだんの暮らしで着た衣服には、文様はあまり見られません。

## 儀式のときなどに身につけるもの

写真7は、<sup>さいだん</sup>祭壇で祈りをする男性たちのようすを写真にしたものです。



写真7

写真8は、儀式のとき男性が頭にかぶるもので、ヤナギやミズキなどを削ったものから作ります。写真7で立っている男性も、これを頭にかぶっています。



写真8

写真7で立っている男性と中央の男性は、肩からかけた帯に刀を吊り下げています。このような刀は、武器としてではなく儀式のとき身につけるものとされています。刀を吊るす帯は、樹皮を素材とした繊維などを使って編まれており、さまざまに文様などを編みこんだものが見られます。



写真9 刀を吊るす帯と刀(日高の<sup>さる</sup>沙流地方)  
この刀に限らず、刀身は実際にものを切るような<sup>とうしん</sup>つくりにはなっていません。また、鞘などに見られる飾りは表側だけで、裏側には見られません。



写真 10 首飾り  
 (左：門別町、右：新冠町)  
 儀式のときなどに女性は首飾りを身につけます。



写真 11 女性の帯（サハリン）  
 帯の部分は皮製で、飾りの金具は皮紐で下げられています。サハリンでは儀式のときなどに女性がこのような帯を身につけたとされています。



写真 12 1935(昭和10)年にアイヌ語研究者の金田一京助氏と久保寺逸彦氏がサハリンでアイヌ語やアイヌ文化の調査をしたときに撮影したものです。左端の女性が写真11のような帯をつけています。

### Clothing and Items to Wear at a Ritual or Ceremonial Occasion

photo 7 : The reenactment of offering prayers at the altar

photo 8 : A headdress for men to wear during a ritual

photo 9 : A sword and sword strap that the standing man in photo 7 is wearing

photo 10: Necklace

photo 11: Women's skin belt with metal from Sakhalin

## 裁縫の用具

針入れや糸巻きなどには、丁寧な彫刻が施されているものも多く見られます。



写真 13 針入れ

針入れにはいろいろな材質や形のものが見られます。これは、鳥の骨で作っており、中の布に針を刺しておくつくりになっています。



写真 14 糸巻き（静内）

糸巻きにもいろいろな種類のものがあります。これは下に針入れがついているタイプのもので

### Items Used for Sewing

photo 13: Needle case

photo 14: Spool

### Other

photo 15: Knife

photo 16: A tobacco container and a pipe for smoking



## その他

写真15のような小刀は、彫り物などの細工に使うほか、<sup>ぼうちよう</sup>庖丁として使ったり、<sup>けもの</sup>獣を狩るときに身を護る武器にもなるなど、いろいろな用途があり、日ごろから身につけていたとされます。長さはおおむね20～30cmでいどのものが多く、<sup>さや</sup>鞘や<sup>つか</sup>柄の部分にいろいろな彫刻が施されているものが多く見られます。



写真 15 小刀

上は鞘のみです。<sup>ねつけ</sup>根付（帯に下げておくときに、落ちないように紐の端に付けておく留め具）が付いています。下はサハリンのものです。



写真 16 タバコ入れ(左)と煙管(右)

タバコをたしなむことは、昔のアイヌの暮らしにも見られ、タバコ入れもいろいろな彫刻を施したのが見られます。<sup>キセル</sup>煙管には、交易で手に入れたものや自分たちで作ったものがあります。

これらの細かな彫刻を施したものは、自分たちが使うほか、土産物などとして早くから本州などにもたらされています。

## 2 家のうちそと

### 家屋

アイヌの住まいのつくりや材料などには、地域により様々な違いがありました。

柱や屋根、壁、床などの材料には、木の幹や枝、樹皮、カヤやササなどが用いられました。

部屋にはカムイ\*が出入りするとされる窓が設けられていました。その窓と炉のあいだの空間は、いっばんに<sup>かみざ</sup>上座として尊ばれました。家の宝物を置く場所もおおよそ決まっていました。



写真 17 復元されたカヤ葺きの家屋  
(アイヌ民族博物館)

博物館などの施設でアイヌの家屋やその一部を展示しているところがあります。これらは、おおよそ20世紀の初めごろまでに建てられた伝統的な家屋を復元しようとしたものです。



写真 18 上座に置かれた宝物など  
(帯広市、大正の終わりごろ)

\*カムイ：アイヌの信仰ではあらゆるものに「魂」が宿っており、中でも動植物、火、水、生活道具など人間の生活に関わりの深いもの、あるいは自然現象など人間の力の及ばないものの多くを「カムイ」として敬いました。「カムイ」というアイヌ語は、日本語では「神」などと訳されることが多いようですが、「神」などの日本語と必ずしも意味が一致するものではありません。そこで、この小冊子では、基本的には「カムイ」というアイヌ語を用いることにしています。

写真18では、左側の壁のところに、儀式のとき身につける刀や首飾りなど（12ページ）が吊り下げられているようすがわかります。

その下に並べて置かれているのは漆塗りの器です。

このような漆塗りの器は、主に交易などによって手に入れたものです。



写真 19 漆塗りの容器  
儀式に用いる酒を造ったり、造った酒などを入れておく容器として用いられました。



写真 20 儀式用の椀と台  
儀式に用いる椀なども多くは漆塗りのもので、ふだんの食事用の椀とは区別して用いられました。



写真 21 酒を捧げるためのへら  
カムイや先祖に祈るとき、酒を捧げるために作られたものです。木や木の根などを削ったもので、彫刻が施されています。

## 2 Housing and Items Used Inside the Dwelling Place

photo 17: Reconstruction of a dwelling with a thatched roof

photo 18: Precious items placed in the sacred space

photo 19: A lacquered container in which grain was fermented in making sake for ceremonies.

It contained sake or precious items.

photo 21: A libation stick used when offering sake at a ritual

家の床には、<sup>し</sup>ござを敷きます。壁にもござを張って仕上げる場合があります。



写真 22 模様をついたござを壁に張ったようす  
アイヌ民族博物館で復元されている家屋のようすです。  
模様をついたござは、儀式のときに敷くか、またはこの写真のように壁に張ったりして用いられるものです。

ござは、ガマやスゲなどを編んでつくります。ござを編むときは、写真23のような機具を使いました。



写真 23 ござ編みのようす（登別市・上武やす子さん）



写真24 ガマ

## 食器のいろいろ

食事のときには、写真 25 のような器<sup>うつわ</sup>や箸<sup>はし</sup>などを用いました。



写真25 食事のときの器など

photo 24 : A loom for ornamental mat

photo 25 : Table Utensils

Utensils such as these shown in the photo 25 were used when meals were served.

## 主屋のまわり

主屋のまわりには、祭壇<sup>さいだん</sup>やクマなどの檻<sup>おり</sup>、倉などのほか、魚や肉を干すための柵<sup>さお</sup>や竿などを設けることもあります。



写真 26 家のまわりのようす（帯広市）  
大正の終わりごろの写真です。

photo 26 : Household scene at the end of the Taisho era.

photo 27 : Pounding grains in a wooden mortar.

This photo shows the reenactment of the pounding of grain according to the tradition of Ainu people. The woman seated is separating grain by the use of a winnower, while others are engaged in pounding the grain with a pestle. The clothes all women are wearing are not working clothes for everyday use, but are designed for ritual, celebratory occasions. An ornamental mat seen in the photo is not normally used during work time.



写真 28 箕

写真 27 杵搗きのようす

穀物などを杵で搗いているようすです。座っている女性は、箕で穀物をよりわけているところです。後ろに写っているのは、倉、クマを飼う檻、ものを干す竿などです。この写真は、昭和初期に白老で昔のようすを再現して撮影されたものですが、女性が着ている衣服はいずれも晴れ着であって日常の労働着ではないことに注意が必要です。また、敷かれているござには模様が見られますが、ふつう、日常の仕事のときにはこのようなござは使わないと言われています。



図 2



写真 29 穀物の取り入れのときには、鎌などを用いるほか、穂を摘み取るためにこのような道具も用いられました。(写真は日高の沙流地方のもので)

### 3 野や山で、海や川で

昔のアイヌの暮らしでは、食べ物を得るために、狩猟や漁撈<sup>ぎよろう</sup>によって動物や魚をとらえたり、野山や海で山菜や木の実、海藻<sup>かいそう</sup>などを採集したり、あるいは農耕を行ってヒエやアワなどの作物を栽培したりすることが行われていました。

ここでは、こうしたときに用いられたものの中からいくつかを紹介します。

#### 狩猟の用具



写真 30 弓と矢

写真の弓はイチイ(オンコ)で作られています。ふつう、矢の先にはトリカブトの根などからとった毒を塗ります。



写真 31 トリカブト



動物をとらえるとき、下の図のような仕掛けを使うこともあります。

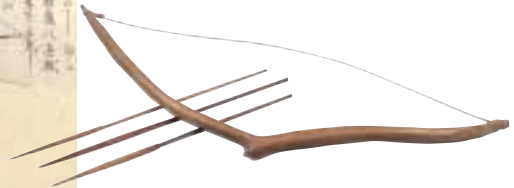


写真 32 仕掛け弓に用いた弓と矢

図 3 仕掛け弓  
動物の通り道に仕掛けます。張ってあるひもに動物が触れると矢が発射され刺さるように作られています。



図 4 小動物用のわな罾の例  
テンなどの小型の動物をとらえるための罾の一例です。下に置かれているエサをとろうとすると紐が引かれて石を載せた重しが落ちてくる仕掛けになっているものです。

### 3 Items Used for Activities in the Field and Mountains and in the Sea and Rivers

#### Utensils for Hunting

photo 30 : A bow and arrows

photo 31 : A set-bow

figure 4 : A type of a trap to catch small game

## 舟と漁具



写真 33 丸木舟（北海道開拓記念館）  
丸木をくり抜いて作られた舟です。川や海を行き来するときの交通手段として、また漁に出るときにも用いられました。カツラ、ヤチダモ、ハリギリ（センノキ）などいろいろな木で作られたようです。写真の舟はカツラの木で作られています。

### Boat and Fishing Utensils

photo 33 : A dugout canoe

figure 5 : A large boat for navigating far from the coast. Planks are horizontally tied together with a rope to the dugout canoe. This made a layer of planks to increase the height so that a vessel could voyage to areas further offshore.

photo 34 : The top of a harpoon



図5 『蝦夷生計図説』  
沖まで航海できるよう、丸木舟に板を縄で綴<sup>つづ</sup>って継ぎ足して大きくした舟の図です。舟の中には、漁で使う網や銚<sup>もり</sup>が置かれています。櫓をこぐほかに、帆を張って進むこともできます。



写真34 銚<sup>もり</sup>（先端の部分）

## 運ぶ・歩く

写真 35 編み袋

シナノキやブドウツルの樹皮からとった繊維を編んで作ります。編み方にもいくつかの方法が見られます。山菜や栽培した穀物などを採るときに容器として広く使われるほか、乾燥させた穀物などを入れて保存するときなどにも使われます。これはシナノキを編んで作ったものです。



写真 36 背負い紐<sup>ひも</sup>（上：石狩、下：千歳）

荷物などを背負うときに用いる紐です。両端の部分で荷物をしばり、中央部の幅広がっている部分を額にあてます。赤ん坊を背負うときにもこのような紐を用いることがあります。写真の下側の、棒が付いているものがそれで、棒の部分に赤ん坊を乗せて背負います。

### Items Used for Carrying and Foot Ware

photo 35 : A woven bag

photo 36 : A carrying strap (A load is tied with both ends of a strap and the wider part in the center of the strap is placed on the forehead of the person who carries the load.)

photo 37 : A sleigh



写真 37 そり(模型)  
サハリンでは冬に犬ぞりが  
用いられました。

## 履き物

履き物としては、サケやシカなどの皮で作ったもの、ブドウツルなどを編んで作ったものなどが知られています。



写真 38 ブドウツル製の履き物  
(旭川)



写真 39 トド皮製の  
長靴(千島)



写真 40 獣皮の靴とかんじき(サハリン)  
動物の皮で作った靴に木製のかんじきを付けた  
状態です。このような履き物は、冬に狩猟をす  
るときなどに用いたとされています。

# [ 3 ] 民具について学ぶために

アイヌの民具について学ぶための基本的な文献や、民具を見学したりすることができる施設を紹介します。

現在も入手できる文献などには、価格を記しました。

## 1 文献など

### 入門的な内容のもの

アイヌ民族博物館監修『アイヌ文化の基礎知識』草風館 1993年 1,600円（税別）

北の生活文庫企画編集会議編『北の生活文庫2 北海道の自然と暮らし』『同3 北海道の民具と職人』北海道新聞社 1996、1997年 各1,553円（税別）

『<sup>しずない</sup>静内地方のアイヌ文化』静内町教育委員会 1997年 400円（税別）

日高の静内地方のアイヌ文化についてわかりやすく説明したパンフレットです。儀式や食べ物、衣服などについて写真や図を使って紹介しています。

財団法人アイヌ無形文化伝承保存会編『アイヌ文化を学ぶ THE CULTURE OF AINU』

財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1997年 4,500円（税込）

日本語・英語の二カ国語版のビデオです。



## 専門書など

アイヌの民具全般について写真をつけて詳しく説明した文献や、博物館などの所蔵資料を写真つきで解説した文献を紹介します。

萱野茂『アイヌの民具』すずさわ書店 1978年 10,000円（税別）

著者の生まれ育った平取町二風谷を中心に、主に日高の沙流川筋で使われていた民具を写真と文章で説明しています。

佐々木利和『日本の美術 第354号 アイヌの工芸』至文堂 1995年 1,553円（税別）  
東京国立博物館や海外の博物館が所蔵するアイヌの民具の写真を掲載しながら、アイヌの民具について工芸品としての側面に焦点をあわせて説明しています。

北海道立アイヌ民族文化研究センター編『バラートシ バログ コレクション調査報告書』  
北海道立アイヌ民族文化研究センター 1999年 1,340円

1914(大正3)年に北海道とサハリンでアイヌの民具を調査した、ハンガリーの人類学者バラートシ・バログ・ベネデクが収集した資料のうちブダペスト民族学博物館が所蔵するアイヌ民族資料を、当センターが借り受け調査した報告書です。英語版もあります(1,210円)。

どちらも北海道行政情報センター（電話011-241-7979）で販売しています。

Spb-アイヌプロジェクト調査団編『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館 1998年 9,000円（税別）

ロシアのサンクトペテルブルクにある同博物館が所蔵するアイヌ民族資料のうち約1,400点についての調査報告書です。日本国内の博物館と比べ、資料の収集地などのデータが比較的是っきりしていること、古い時代に収集された資料やサハリンの資料が多く含まれていることなどが特徴です。

東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料篇』東京美術 1992年 8,000円（税別）

同博物館が所蔵する1,000件余りのアイヌ民族資料を写真つきで紹介しています。



---

## 2 施設

### 博物館など

北海道内では、多くの博物館がアイヌの民具を展示しています。また、道外でもアイヌの民具を展示しているところがあります。

ここでは、これらの施設の中から、見学の手引きになるような所蔵品の解説図録が刊行されているところ、専門の学芸員や研究者がいるところを中心にいくつかを紹介します。

### 〈道内〉

---

北海道開拓記念館：	札幌市厚別区厚別町小野幌	電話 011-898-0456
北海道立アイヌ総合センターアイヌ民族展示室：	札幌市中央区 かでの2・7(7階)	電話 011-221-0462
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園：	札幌市中央区	電話 011-251-8010
財団法人アイヌ民族博物館：	白老町若草町	電話 0144-82-3914
平取町立二風谷アイヌ文化博物館：	平取町二風谷	電話 01457-2-2892
萱野茂二風谷アイヌ資料館：	平取町二風谷	電話 01457-2-3215
苫小牧市博物館：	苫小牧市末広町	電話 0144-35-2550
市立函館博物館：	函館市青柳町	電話 0138-23-5480
函館市北方民族資料館：	函館市末広町	電話 0138-22-4128
帯広百年記念館：	帯広市緑ヶ丘	電話 0155-24-5352
旭川市博物館：	旭川市神楽	電話 0166-69-2004
北海道立北方民族博物館：	網走市潮見	電話 0152-45-3888
北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ：	網走市大曲	電話 0152-43-1149



---

## 《道外》

東京国立博物館：	東京都台東区上野公園	電話 03-3822-1111
国立民族学博物館：	大阪府吹田市千里万博公園	電話 06-6876-2151
天理大学附属天理参考館：	奈良県天理市守目堂町	電話 0743-63-1515
アイヌ文化交流センター：	東京都中央区八重洲	電話 03-3245-9831

\* 民具の展示などは行っていませんが、この小冊子で紹介した文献や視聴覚資料を閲覧することができます。

### 展示会など

近年、民具の製作を続ける人たちによる個展や、教室の作品展なども開かれるようになってきています。で紹介した博物館などでも、通常の展示のほかに、アイヌの民具を取り上げた特別展などが開催されることがあります。こうした特別展のときには、解説つきの図録が発行されることもあります。

### 学習・体験できる施設など

民具の作り方などを実際に学ぶことのできる施設や講習会なども、近年各地で開かれるようになりました。ここでは、一般の希望者を対象に毎年定期的に講習会を行っている施設などを紹介します。具体的な日程や内容などはそれぞれの機関にお問い合わせください。

北海道立アイヌ総合センター：	札幌市中央区かでの2・7(7階)	電話 011-221-0462
財団法人アイヌ民族博物館：	白老町若草町	電話 0144-82-3914
ヤイユーカーラの森：	札幌市南区常盤	電話 011-592-1748

---

## その他本書を書くにあたっての参考文献

- 佐々木利和『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館 2001年  
アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年  
『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 1968年  
日本民具学会編『日本民具辞典』ぎょうせい 1997年

## 協力（敬称略）

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 財団法人アイヌ民族博物館  
旭川市博物館 北海道立アイヌ総合センター 北海道開拓記念館

佐々木利和 津田命子 齋藤玲子 出利葉浩司 上武やす子 為岡 進

## 写真提供、出典等

写真1 北海道立アイヌ総合センター

写真2、5、8、9、10、13、14、15、21、25、28、29、30、32、34、35、36、38、39 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

写真3、11 ブダペスト民族学博物館所蔵パラートシコレクション

写真4 旭川市博物館

写真6、37、40 ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館

写真7、17、20、22、27 財団法人アイヌ民族博物館

写真2、16、19、33 北海道開拓記念館

写真18、26 帯広市図書館

写真23 津田命子

写真31 静内町郷土館

図1、3 秦権麿『蝦夷島奇観』（復刻版：佐々木利和・谷澤尚一研究解説、雄峰社、1982年）

図4 出利葉浩司

図5 秦権丸『蝦夷生計図説』（復刻版：河野本道・谷澤尚一解説、北海道出版企画センター、1990年）

上記以外は当センター所蔵写真



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。

古紙配合率100%・白色度70%

発行

平成14年9月

編集

北海道立アイヌ民族文化研究センター

HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階

TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>

サハリンの東海岸

